さくらいのひと、みっけ！

坂内 明子 さん

時を越えてよみがえったいにしえの果実
隠し味はたっぷりの愛情

坂内明子さんは、大字穴師にあるカフェ「きてきて 山の茶屋」の店長。大和さくらいブランドに選ばれている、日本古来の柑橘類・大和橘を使用したビール「穴師橘ラガー」を販売しています。

古事記や日本書紀によると、大和橘は垂仁・景行天皇の時代に現在の大字穴師周辺に持ち込まれたとされるされる、桜井市とも深い関わりを持つ柑橘です。「草刈りが趣味」と笑いながら話す坂内さんは、桜井市で大和橘を復活させるプロジェクトに興味を持ち、ボランティアとして参加。愛情を込めて栽培に取り組んだ結果、平成 30 年には大和橘の木は 1,000 本を超えました。

クラフトビールの開発は、プロジェクトメンバーの発案です。開発でこだわったのは、大和橘の香りを生かすこと。「穴師橘ラガー」は若い人や女性を中心に人気があるといい「最高のビールを自分の目の前で飲んでもらい、お客さんの笑顔が見られることがうれしい」と喜びを語ります。穴師の地で柑橘の歴史を紡いできた人への思いや、より多くの人にこの地のことを知ってもらいたいという思いを込め、商品名にもこだわったといいます。

今後はスイーツや調味料の開発などにチャレンジしたいという坂内さん。これからも、心を込めて育てる大和橘の木々を見守ります。

共に生きる

～つながることの大切さ～

ひとりで自立し元気に暮らしていた母が突然、認知症を発症した。転んで一時的に動けなくなり、体力が落ちたことが原因だった。当初はけが以外問題はなかったが、それまで普通にできていた電話やリモコンの操作ができなくなった。あっという間に夜中も歩き回るせん妄状態になった。家族のこともわからなくなり、車いすを利用するようになるまでひと月もかからなかった。

家族は認知症がもとで歩けなくなることも知らずパニック状態になり、当時の詳細な記憶がない。ただ、母の中から家族の存在が失われていくように感じられ、そのことへの強い焦りと先々への不安があったことは鮮明に覚えている。

慣れない介護に右往左往する中、思ったことは「つながっていて良かった」のひとことだ。80 歳を過ぎて介護サービスとは無縁だった母も、けがをした際に、地域包括支援センターの担当ケアマネージャーさんとつながりができていた。安心して相談できる人がいたことはありがたかった。また、ある施設で相談に乗ってくれたケアマネージャーさんの「私の親も認知症です。大丈夫ですよ」というひとことでも不安感が薄れ、精神的にとても楽になった。

支えてくれる人たちへ感謝し、同じように老いた親を持つ友人たちと、つながることの大切さを共有している。